

巻 頭 言

生物資源科学部長 柴田 均

Dean, Prof. Dr. Hitoshi SHIBATA

生物資源科学部研究報告の第12号 2007が発行される運びとなりました。ご尽力いただいた学術委員会ならびに関係各位に深謝します。

本号では18年度における教員の活動状況を業績目録として掲載してあります。著書、学術論文、学会発表、国際交流の実績、留学生の受け入れ状況、共同研究や受託研究、寄付金、科学研究費の採択、特許等、民間・地域社会への協力、受賞、招待講演などに分類して記載されています。連合農学研究科からも、毎年度末に「年報」が発行され、教員の研究活動として、公表論文等、招待講演、学術賞等の受賞、研究助成について、各専攻の連合講座ごとに構成大学の順に記載されています。また島根大学全体として、教員の個人評価が昨年度試行され、教育、研究、社会貢献、管理運営を包含する膨大な項目についての16・17年度の活動状況が対象となりました。本年度から教員の個人評価が本格実施され、「評価を通じて本学の教育・研究活動等の質的向上、または職務の向上を図り、もって本学の理念・目標の実現を図ること」を目的としており、教育研究のレベルを向上させるよい機会となるものと捉えられます。

島根大学は来年度、(独)大学評価・学位授与機構による「国立大学法人評価」を受審することが決定しております。国立大学法人化後の中期目標期間における教育研

究の成果が評価の対象とされています。「研究領域」では、研究活動と研究成果の状況が研究水準に関する分析項目とされています。研究水準は、当該学部・研究科等の研究活動やその成果を享受する人々や組織の期待に応じているかが判断基準とされています。研究業績の判断は、学部・研究科の研究目的に照らして、当該分野において通常の水準に達している業績を「相応の水準」(B)(合格)と判断し、その上で、それを上回る業績について、第三者による評価結果や客観的指標等の根拠資料に基づいて「優秀な水準」(S)、さらに「卓抜した水準」(SS)を判断することとされ、学部・研究科を代表する優れた研究業績を選定することになっています。

このように、教員一人一人の研究の内容とレベルさらにはその成果が評価を受けることで、国民に対する説明責任の一端として問われるようになり、大学教員の業務の柱の一つである研究を取り巻く環境がすでに大きく変貌しております。生物資源科学部・研究科が独創的でレベルが高い研究を推進するとともに、全体のレベルを上げるための一端として、生物資源科学部研究報告、特に業績目録が充実することを念願しております。

平成19年6月30日